トルコを読み解くキーワード

日本貿易振興機構（ジェトロ）
ものづくり産業部部長
村橋　靖之

トルコから帰任して早3カ月が過ぎた。現職は、「ものづくり産業部」という主に日本の中小製造業の海外展開をお手伝いさせていただく部署にいる。日本に戻ってきて強く感じるのは、中小企業にとってトルコは遠いなあ、ということだ。所掌する産業は、一般機械機器、工作機械、インフラ、アパレル、テキスタイル、伝産品・日用品など多岐にわたるが、トルコに輸出したい、という企業に会うことはめったにない。多くの企業の顔は圧倒的に中国、東南アジアに向いている。そしてトルコに対しては、どちらかというとネガティブなイメージをもたれていることが残念だ。

トルコ激動の３年間

振り返ってみればこの3年間のトルコは激動の時期だったといえる。私が赴任する2015年夏までは、2010年以降続くトルコ・ブームともいえるような状況で、多くの企業がトルコを訪問し、進出企業数も毎年20社以上を数え、累計200社を超えた。しかし、その後、同年7月ごろからISやPKK（クルディスタン労働者党）によるテロがイスタンブールやアンカラなど大都市でも頻繁に起こるようになった。2016年6月のイスタンブール・アタテュルク空港でのテロ事件は覚えておられる方も多いのではないだろうか。2016年7月にはクーデター未遂事件も起き、トルコの政治・治安への不安が広がった。2017年4月に国民投票で強い権力を有する大統領制への移行が決定され、2018年6月に新たな大統領制に基づくエルドアン大統領が誕生し、強権的なイメージが定着した。とどめは同年8月の米国との関係悪化に起因するリラ・ショックだ。これにより経済面での不安も増大した。

この間、日本企業の進出もビジネスも停滞気味で、大規模インフラプロジェクトであるチャナッカレ大橋の受注を逃したり、目玉だった原発案件も頓挫したり、明るい話題が少なかった。政治的にも経済的にも今後のトルコは大丈夫なのか、という否定的な見方が大宗を占めているように思う。

確かに、トルコ経済は構造的な脆弱性を抱えている。2002年にエルドアン大統領（当時は首相）が政権を握って以来、外資導入や地方の開発、インフラ整備などを梃子に高成長を続け、今では一人当たりGDPは1万ドルを超える中高所得国へと成長した。しかし、エネルギー資源をもたず、貿易赤字を主因とする恒常的な経常赤字体質、高インフレ体質、国民の貯蓄率の低さなど先進国の仲間入りを果たすためには克服すべき課題も多い。何よりも「中進国の罠」を脱するための産業の高付加価値化が急務となっている。外交に目を転じれば、長期化するシリア内戦、米国・EUとの関係悪化など難しいかじ取りを迫られている。

それでも、この国はしたたかに生き延び、このまま沈んでいくような国ではない。将来においてもその存在感を発揮し続けるだろう。

なぜ、そう考えるのか。3年間の駐在経験に基づき、勝手ながら「トルコを読み解く6つのキーワード」として以下にまとめてみた。

イスタンブール旧市街を臨む（著者撮影：以下同）

トルコを理解するためのキーワード

その１：アナトリアの大地

トルコはボスポラス海峡を境にアジア側とイスタンブールのあるヨーロッパ側に分かれるが、アジア側のアナトリア半島が国土の大部分を占める。この地は古くから多数の民族が交錯し、争ってきたことから困難を乗り越えるタフさと自信をもつ。加えて、豊かな自然に恵まれ、食べ物に困らないという余裕がある。

その２：イスラーム的価値観と相互扶助の精神

トルコはよく世俗的な国、といわれるが、イスラーム教徒が国民の99%を占め、そのうちの約4分の3はイスラームの価値観を大切にする人たちだ。そしてトルコの人たちは優しい。弱いものは守り、強いものには果敢に立ち向かう。子どもや高齢者に優しく、礼節を重んじ恩義は忘れない。家族を核とする人間関係を重視し、法律や規制を超えた社会のセーフティネットが存在する。国としてシリア難民を350万人以上も受け入れたり、パレスチナやロヒンギャなどイスラームの同胞に救いの手を差し伸べたりする理由もここにある。

その３：オスマン帝国とアタテュルク

トルコ人はプライドが高く、誇り高い人たちだ。その背景には、近代に至るまで500年以上も大帝国を維持してきた歴史と、第一世界大戦後国土分割の危機を救い今のトルコ共和国を勝ち取ったムスタファ・ケマル（アタテュルク）の存在がある。トルコ人の強い愛国心や民族意識はここに依拠すると思われる。

ゲリボル半島の戦没者慰霊碑：
トルコ独立のきっかけとなった激戦の地に建てられた、戦死した兵士を慰霊する碑

その４：権威主義

誇り高いがゆえに、役職重視の権威主義的傾向がある。意思決定もトップダウン型で、ボトムアップ型の日本とはビジネススタイルが異なる。ときに傲慢とも思えることもあり、アジアの国々のように日本に歩み寄ってくれることはない。

その５：短絡的・近視眼的

過去の浮き沈みの激しい政治経済情勢の経験からか、臨機応変の柔軟性や瞬発力には優れるが、長期的視点に立った戦略性や思考に欠ける。将来よりも現在、貯蓄よりもモノを重視する傾向があるからか、価格交渉は厳しい。まずはやってみようというチャレンジ精神も旺盛だ。現状は厳しくても将来に対しては「なんとかなるさ」という楽観さをもつ。

その６：保守的

昔から伝わる文化、伝統を重視する。特に食については保守的なので、たいていトルコ料理が一番となり、外国料理がなかなか広まらない。また、トルコでは老人ホームや介護施設がなかなか普及しないが、家族は家族で面倒を見るもの、という考え方が根底にある。見方を変えれば、民族としてのしっかりしたアイデンティティーをもっているともいえる。

これらのキーワードは、ビジネスの場でも、生活の場でもいたるところで感じられる。日本人からすると価値観の違いや付き合いづらい部分もあるが、極めて人間らしい健全な社会が存在する愛すべき国なのだ。

トルコのポテンシャルについて、よく地政学的優位性があげられる。アジアと欧州の結節点にあり、飛行機で4時間以内の経済圏として人口16億人、GDP24兆ドルの市場規模を有する。この大市場を日本が取っていくために、トルコ国内で製造して近隣諸国に輸出する、トルコ企業と協力して第三国に展開するなど、パートナーとしてトルコは最適だと思う。

上記キーワードを参考にしていただき、エルドアン大統領の発言や断片的報道に惑わされることなく、トルコという国への理解を深めていただけると幸いである。